校内研究会　10月9日

高学年分科会授業提案

第６学年　道徳　主題名「真の友情とは」　　2-(3) 友情・信頼

資料名　ロレンゾの友達　(日本標準　2005 年度版)　　指導者　　山本　光

授業の流れ

１　良い友達とはどんな友達か、考えていることを発表する。
２　「ロレンゾの友達」を読み、話し合う。
３　自分のことについて考える。
４　教師の説話を聞く。

協議会

＜分科会提案＞

共感的な話し合いだけに留まらず、物事に対して客観的、批判的な見方・考え方もできるように意見が対立するように資料を活用した。また、小グループの話し合い活動を取り入れたり、相違を把握しやすい板書の構成を図ったりした。さらに、事前アンケートを導入と終末で提示することで現在の自分とねらいとする価値を振り返られるようにした。

＜自評＞

〇６年１組

・アンドレ派が０人だった。そのため、「自分がアンドレだったら？」というかたちで、アンドレについても考えるようにこちらから促し、補っていくような授業の展開だった。

・「三者とも、ロレンゾのことを考えていたんだね。」というところに落とすのが難しかった。

〇６年２組

・１組とは児童の反応がかなり違った。ニコライ派が多数だったが、サバイユの考えを支持した児童もいた。アンドレ派は１人。子供たちは、「善悪」の視点が強いのかもしれない。そこから別の視点が出てくるだけでも、「変容」なのではないだろうか。

＜協議＞

・誰を支持するか名前カードを使って分かりやすかった。
・同じ意見の者同士で話し合うというグループ分けがおもしろかった。自分が思ったものについて話し合うことが一番話しやすい。ぼんやりと「この人を支持したい」と思っていたものを、明確に言葉にすることができる話し合いだった。
・グループではよく話し合っていたが、全体の発表となると無難な発言になってしまった。
・アンドレ派が１人だったが優しい笑顔とうまい言葉で支えていた。とても良い意見を言っていたが、それが児童全体に出て行けば、もっとおもしろくなった。
・「罪を犯したのかどうかは、はっきりしていない」ということを全面に出した方がよかった。アンドレ派がほとんどいなかったので、アンドレのよさを考えさせてもよかった。

指導・助言　　文部科学省教科調査官　赤堀　博行 先生

・「共感的」とは登場人物の感じ方や、置かれている状況をそのまま理解することではなく、登場人物の立場や置かれている状況を基に、自分との関わりでその感じ方や考え方を類推することである。
・導入でアンケートを用いたのは、「今日は『友達』のことを考える」ということを児童に分からせるという点で有効であった。
・同じような考えでも、そう考える根拠は様々である。従って、今回のように、同じ考え方のグループでの話し合いでも、他者理解はできる。
・道徳の時間は、必ずしも児童の考えを「変える」ことをねらいとしているわけではない。「深める」のである。今回の授業で、児童の友情に対する考えは深まったと思う。何について深めるのかがもう少しはっきりするとよかったのではないだろうか。授業では、「何を考えさせるのか」という教師の思いが大切である。